



海外生活あれこれ

トロント大学 名誉教授

西里静彦

(にしさと しずひこ)



そのむかし

中学生の時サンフランシスコに住む二つ年下の少女バーバラは「手紙を送る前に誤りを直してから送るように」と毎回書いてきました。タイプライターもコンピューターも無い時代、手紙を書き直したことはありません。しかし英語を書けるという思い上がりがあり、ヴァージニア・メイヨ、アン・ブライス、ジューン・アリソンなどにファンレターを出し、西部劇の駅馬車の雄大な音楽に魅され、ジョー・スタッフォードが歌うテネシーワルツのセンチメンタルなメロディーに耳を傾け、アメリカ文化の到来を喜びました。そして1961年、アメリカに留学しました。

その年アメリカの大統領は、アイゼンハウアーからケネディに、ロジャー・マリスが61本のホームランでペーブ・ルースの60本の記録を更新、大鵬と柏戸が横綱に昇格。翌年は堀江謙一のヨット太平洋横断成功の快挙、1963年ケネディ大統領の暗殺、1964年東京オリンピックで日本が一躍世界の桜舞台に登場、王貞治が55本の本塁打日本新記録、1965年には、東京の人口がニューヨークを抜き、世界最大都市になり、カナダは紅白の国旗メープルリーフを採択、朝永振一郎がノーベル物理学賞を受賞。

私が留学していたのは、このように新進国日本の経済界進出に大きな期待がかけられた時期、見ること聞くこと珍しかったのですが

51年後の今は海外の生活の珍しさが消えました。卑近な経験から始めましょう。

時間の正確さ

トロントの新聞グローブ&メールは昨年前半期に、バス、地下鉄、電車が始発駅を時間前に出たという苦情が565件あったと報道。私もその経験者でバスの停留所には出発の10分前に行くことにしています。札幌を訪れた時デパートの開館は10時、その1分くらい前にドアが開いたので入ったところ店員が「まだ開館までに時間があります、あと少々お待ちください」と融通が利きません。千歳空港で搭乗時間は秒読み、これも息苦しい感じでした。トロントでは秒読みをするところはなく、入館、搭乗に息苦しさを感じませんが、時間が過ぎても待たされる時は困惑します。時間に関し、日本は数学的正確さ、カナダは信頼区間の統計的正確さの代表国です。

大学に入る

カナダには大学入試がなく、オンタリオ州では高校で政府指定の単位をとれば大学入学資格がとれます。高校のカウンセラーが学生と面会し、学生の希望、成績表、課外活動の情報をもとに各学生に三つの大学を推薦、学生が大学入学センターに書類を送り、大学が入学の可否を決定します。近年、カナダには海外から高校への留学生が増えています。カナダの高校から大学へ進むほうが、海外からカナダの大学へ進むより遥かに簡

単だからです。大学では留年という仕組みが無いので学生は所定の単位をとった時に卒業します。日本では総合大学を university、単科大学と短期大学を college というようですが、トロント大学 (University of Toronto) にはたくさんの college があり、その一つは University College といっています。

客員教授とは

海外から客員教授を招いた時、私は帰国前に必ず講演をしてもらい、可能なら共著論文を期待しました。これは一般より欲張った望みです。私がドイツ、スペイン、日本に招かれた時は、講義と講演のほかホストと共著論文か、本を執筆しました。しかし、客員教授は一般に何処の国でも自由を満喫し、鋭気を養う良い機会です。ただ日本の客員教授へのもてなしはあまりにもよく、そのお返しとして英語の論文の校正、研究の相談、留学の相談、共同研究、講義、英会話、雑談などで、もっともっと「利用して」ほしかったと思います。この思いは関西学院大学で客員として一緒だった世界的に著明な心理学者のウインザー大学名誉教授・小橋川慧先生ともよく話しています。

定年制廃止

オンタリオ州でも数年前に定年退職制度が廃止されました。当初は高齢教授を如何に解雇するか、若い人の就職難を招くのではないかという危惧がありました。しかし「平均61歳で職を去り、第二

Profile — 西里静彦

1959年、北海道大学文学部（実験心理学）卒業、1961年、同修士課程修了。1966年、ノースカロライナ大学（UNC）大学院修了（Ph.D.）。国際計量心理学会元会長、サイコメトリカ元編集長、アメリカ統計学会フェロー、行動計量学会名誉会員、UNC心理学同窓会 Distinguished Alumnus。

の人生を楽しみたい」というのが最近の調査結果で、若い人の就職難に悪影響はないようです。私はその制度施行前の2000年に定年65歳で退職しましたが、今は自分の年金で研究を続け、若い人の仕事を奪ってはいません。日本でも定年制の廃止は可能でしょうか？年齢による差別は余りにも酷です。

生活のなかの宗教

2011年12月訪日のとき池上彰氏がテレビでアメリカの宗教の話、特にケンタッキー州に近年建てられた創造博物館を紹介していました。海外では如何に宗教が生活の基盤になっているかに驚きます。60余年前、私のペンフレンドのバーバラは、よくビリー・グレアムの説教のパンフレットを送ってくれ、私がエスペラントを勉強していると書くと、人工語は神を冒瀆するものでバベルの塔のように崩れ去る、といった調子でした。1961年、サンフランシスコからフルブライト留学生同志社大学の浜（堀内）治世さんとノースカロライナ大学に向かいましたが、驚いたのはそこで見た映画“*Inherit the Wind*”（『風に従え』、1960年、スペンサー・トレシー、フレデリック・マーチ、ジーン・ケリー等）でした。内容はダーウィンの進化論を教えた高校の教師が有罪になるというもので、これを機に当時アメリカでは進化論を教科書に載せるか否かの議論が新聞でも討論されていたのを知りました。

アメリカでもカナダでも「創造主義者（creationist）ですか？」という質問を受けました。創造主義者とは神が人間を創ったと信ずる人で、進化論を否定します。留学から半世紀経った先日、アメリカでは現在、創造主義者が国民の43パーセントもいるというCNNの報道を耳にして驚きました。これはキリスト教に限らずイスラム国家でも同じで、サウジアラビアとスーダンでは進化論を学校で禁止しており、世界には多くの創造主義者がいるとのこと。しかしカナダでは進化論を教科書から除こうというニュースを聞いたことがありません。日本では、このような進化論の議論に大変驚く人が多いと思いますが、これこそまさに日本人の宗教観が他国のものに比べて如何に異なるかを示すものです。

昔日の影と日

留学の頃は黒人の差別がレストラン、映画館、散髪屋などでみられ、クー・クラックス・クランが堂々と日中行進した時代でした。私はデューク大学のある隣町ダーラムまでバスで行くときは前方が白人席、後方が黒人席なので何時も空いている真ん中の席に座りました。1963年、国際心理学会がワシントンで開かれた時には日本の心理学者も大勢出席しましたが、あれは有名なマーチン・ルーサー・キングが率いるワシントンへの大行進があった時で多くの警官が街角にみられました。今日、政治、経済、教育、芸能、スポーツで黒人が広く活躍しているのを見ると、アメリカ、そして世界の大きな変化に驚きます。しかし宗教国家アメリカでは進化論の進化が低迷しています。

お国柄

アメリカとカナダはずいぶん違います。アメリカでは何が起きて

も意見が両極端に分かれます。死刑、同性結婚、銃の規制、妊娠中絶、不法移民対策、戦争、健康保険、増税等々に関する意見が両極端に分かれ妥協がみられません。民主党と共和党の対立は誰しも知るところです。最近の統計ではアメリカの平均税率は18パーセント、カナダは34パーセントとなっていますが、赤字のアメリカは増税に反対する共和党が下院の過半数を握っていますので、増税は可能でしょうか？「高所得者から税金をもっと」という民主党に対し、共和党は「サービスカットで赤字を埋めよ」と言います。

アメリカより倍近くも税金の高いカナダでは、いつの間にか税金が増え、それで政府が赤字を埋めています。何年か前にトロント市内の21万人の高校生のうち、海外から来た9万人は特別の英語教育が必要だという記事を読みました。これは市にとって大変な財政負担ですが、市民の税金がそれを賄っています。「税金はサービスに必要」を信じる福祉国家カナダでは増税反対の抗議などはなかなか実を結びません。ここにアメリカとカナダの大きな国民性の違いがあります。

カナダは移民国家

アメリカでは盲腸の手術をするで財産をつぶすといますが、カナダでは医療費が無料、盲腸の手術も無料です。外国から妊婦の旅行者が出産間際にカナダに着陸するのもうなずけます。カナダの永住ビザ取得はアメリカのグリーンカード取得よりはるかに易しく、多くの難民や移民を受け入れてきました。アメリカでは一千万人を超えるメキシコからの不法入国者（2012年4月24日のグローブ&メール紙）に頭を悩ませています。

カナダで目立つのはフィリッピンからの移民で、カナダの病院の

看護師、介護福祉士、そして住み込み看護の特別ビザを利用して老人介護に大きな貢献をしています。一昨年日本を訪れた時フィリピンからの介護福祉士のほとんどが日本政府の語学試験をパスしなかったという悲しい記事を見て違和感を覚えました。多くの日本企業の人々は、これまで海外で語学に苦勞しながらも仕事をしっかりやり遂げました。フィリピンからの介護福祉士さんは、日本で立派に役目を果たしていたのではないのでしょうか？日本人の英語の問題も、海外から日本に来る人の日本語の問題も一世に限られた問題で、万事一世の言語能力だけで決めるのはどうでしょうか？彼らの二世は完全に母国語を身に付け、生まれながらの愛国心を持っています。

五つの標準時間帯を持つカナダは広大な移民の国、私がカナダに来てから人口が二倍に増え、今は3600万人、自然資源に恵まれた国土開発には1億の人口が必要だといわれています。高齢化が進み、若い労働力を必要としている日本は、これからどうしたらよいのでしょうか？移民の導入は日本文化を破壊するという考えはもっともです。カナダでは多文化主義と称して移民の祖国の文化保護に努めていますが、カナダの国民性、文化が移民により急速に変化しつつあることには間違いありません。日本人の文化に対する危惧と高齢化の現実、何処かに妥協点

はみつかるのでしょうか？

移民国カナダの影の問題は、カナダの国籍を持った人の海外移住です。カナダの人口の実に8.8パーセントが外国で生活しています（グローブ&メール紙、2011年6月27日）。行先はアメリカ、香港、イギリス、レバノン、オーストラリア、中国、韓国、ドイツ、日本で、多くはカナダに帰化して（市民権を取って）から何年後かに祖国に戻った人たちです。カナダ国籍でもらえるカナダ政府の年金を考えると、国民の1割弱の外国暮らしはカナダ経済にどのような影響を与えているのでしょうか？

国際都市の諸問題

トロントは世界で最も多民族の住む街で、昨年のトロントの新聞によればトロントの人口250万の50パーセントが外国生まれ（移民が集まる郊外を含む550万の大トロントではその比率はもっと高いはず）です。カナダは今や二世、三世、四世の時代で、カナダ生まれがもっと多いと思いましたが、今の外国生まれの50パーセントは2006年には48パーセント。これで今でもどんどん移民が入っていることがわかります。トロントには韓国街、中華街、ギリシャ街、ユダヤ人地区、リトルイタリー、ポルトガル街、インド地区、カリブ海地区、チベット地区などありますが、例外は日本人で、日本人街はなく、日系人は散在して暮らしています。これは戦争勃発時、大勢集まって集落を

つくっていたカナダの日系人は脅威の対象とみなされ、財産没収、強制収容された経験に基づく先人の知恵によるといわれています。

140を超える言語が話されるトロントでは国際結婚が数年のうちに33パーセント増えました。2010年5月1日のトロントの新聞によりますと、国際結婚の比率の高いほうから日本人59.7パーセント、ラテンアメリカ人30.7パーセント、黒人25.5パーセント、フィリピン人19.8パーセント、アラブ人14.4パーセント、韓国人10.8パーセント、中国人9.5パーセント。日本人の国際結婚の比率が約60パーセントと群をぬいて高くなっていますが、私はこの比率は今はずっともっと高いと思います。日系人の人口は大トロントで約0.5パーセント、日本からの移民が減っている現在、カナダにおける「日系人」の影が薄くなりつつあります。そういう私も国際結婚、孫リンカン三世まで遡ると日本、英国、フランス、イタリア、ギリシャの血を引いており、容貌には日本人の面影がありません。これはカナダの日系社会の現状で、新しい世界の縮図かもしれません。

人種融合の道をたどっている世界の他の国に比べて、単一文化の国・日本は国民の「くつろぎ」を育む住みやすい国です。次回には、「日本らしさ」が海外の生活を経るとどのように変化するかを書いてみたいと思います。

読者の声投稿募集中！

『心理学ワールド』への、ご意見・ご感想をお待ちしています。

投稿は、お葉書・Eメールどちらでもけっこうです。世代と性別をあわせてお知らせください。

●送付先 〒101-0051 千代田区神田神保町2-10 (株)新曜社 第一編集部 morimitsu@shin-yo-sha.co.jp